

2025(令和7)

10/18 (土)

徳島大学総合科学部 教授
荒武 達朗

"在台二世"文学者 新垣宏一の紹介

講演内容：

日本統治下の台湾で活躍した文学者に新垣宏一にいがき こういちという方がいます。彼は1913年台湾生まれ、徳島を本籍とします。本県とゆかりの深い人物ですが、県内での知名度はそれほど高くありません。むしろ台湾の学界で植民地文学の重要人物として評価されております。この講演では、新垣宏一の人物像について紹介するところから始めたいと思います。そこから徳島との関係、特に彼が戦後故郷に引き揚げてから取り組んだモラエス研究を通じて考えてみることにします。

11/15 (土)

四国大学文学部日本文学科 教授
須藤 茂樹

豊臣秀吉の天下取りを 支えたふたり

—実弟大納言秀長と「天下一茶の湯名人」千利休—

講演内容：

令和8年の大河ドラマは「豊臣兄弟」。そこで豊臣秀吉の天下統一を支えたふたりの人物にスポットをあてます。

ひとりとは秀吉の実弟で、政治面で支えた大和の大納言豊臣秀長です。もうひとりとは茶聖と呼ばれた茶の湯の大成者と言われる千利休です。

古文書や古記録、遺品からふたりの役割について紹介します。

12/20 (土)

徳島県立総合大学校 とくしま学博士
森本 春男

1970年頃からの気候変動について

講演内容：

地球は寒冷化しており氷河期に向かっているというのが定説でしたが、1985年の気象に関する国際会議で、地球温暖化が現実の脅威であり、人類の活動がその主要因であるという科学的コンセンサスが示されて以来「地球温暖化説」が一般にも広まり始めました。しかし、各種気象海洋データでは、1970年頃を境として、地球温暖化の傾向を示しています。地球温暖化の影響として、巨大台風の発生や集中豪雨の多発、極端な気温上昇や乾燥化、海洋では、海面上昇、海水温上昇、海洋酸性化などがすでに発生しています。

最近、一部の調査や報道では、地球温暖化に対する一般市民の意識が低下している、あるいは関心が薄れているという指摘が見られますが、気候変動に対する関心や興味をいつまでも持ち続けられるような講義にしたいと考えています。

2026(令和8)

1/17 (土)

徳島市立徳島城博物館 主任指導員
根津 寿夫

徳島ヒストリー

—城下町で暮らした人びと—

講演内容：

徳島市は城下町に起因する町で、天正13年(1585)、阿波国の大名となった蜂須賀家政が徳島城を築き、その周囲に城下町を設けたことに始まります。大小河川の乱流する中洲にできた徳島では、河海を水上の道に利用し、さらに阿波藍の隆盛も加わり、繁栄を極めました。

市制が施行された明治22年(1889)には、徳島市の人口は約6万人で、全国第10位の大都市に成長していました。

ここでは、城下町徳島がどのように生まれ展開していったのか、そうした町の歩みに加えて、人びとの暮らしの実態を探ることで、近世城下町とはどのようなものだったのか、あらためて考えてみたいと思います。

2/28 (土)

徳島県立博物館 上席学芸員
辻野 泰之

徳島県の恐竜時代の地層と化石 —勝浦町での恐竜化石発掘調査を中心に—

講演内容：

徳島県は、恐竜時代(三畳紀、ジュラ紀、白亜紀)の地層が広く分布しています。特に白亜紀の地層の分布がもっとも大きく、その分布は、おもに県内の2地域に限られています。ひとつは、勝浦川盆地周辺に分布する白亜紀前期(約1億3000万～約1億年前)の地層である物部川層群、もう一つは、徳島県と香川県の県境の阿讃山脈周辺に分布する白亜紀後期(約8000万～約7000万年前)の地層の和泉層群です。

近年、勝浦町に分布する物部川層群から、相次いで恐竜をはじめとする多様な動物化石が発見され、全国的に注目を集めています。本講演では、勝浦町で実施している恐竜化石発掘調査を中心に、徳島県の恐竜時代(中生代)の地層や化石について紹介します。

3/21 (土)

崇城大学(旧 熊本工業大学) 元教授
木村 義政

コンピュータによる文字認識の 過去・現在・未来

講演内容：

いまやスマートフォンが人間のように文字を読み取る時代が来ています。この技術は1968年の郵便番号自動読取区分機から始まりました。その後、1980年代になってついに漢字が読めるようになり世界一になります。

この講演では、文字認識がどのように進化しどんな製品でどう使われてきたかを紹介します。また近年、ビジネス改革の手段として注目されているデジタルトランスフォーメーション(DX)において文字認識が果たす役割や、昨年ノーベル物理学賞を受賞した人工知能(AI)との関連についてもお話しします。